令和６年度

宮崎県学校図書館教育研究大会
県 北 大 会 研 究 紀 要

大会主題

「豊かな心と学びを育む学校図書館」

美郷町 御田祭

日向市 クルスの海

延岡市 愛宕山からの夜景

高千穂町 真名井の滝

期　日　令和6年8月8日(木)

会　場　延岡市カルチャープラザのべおか
　　延岡市社会教育センター

宮崎県学校教育研究会図書館教育部会

あ い さ つ

宮崎県学校教育研究会図書館教育部会
会　長　　有　田　勝　則

この度、県内各地より多くの皆様のご参加をいただき、令和６年度宮崎県学校図書館教育研究大会県北大会を開催できますことについて心より感謝を申し上げます。

さて、今後の学校図書館の活用の在り方につきましては、新学習指導要領総則の中で、「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童・生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童・生徒の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実する」ことがうたわれております。また、特別活動の学級活動の中で、一人一人のキャリア形成と自己実現のために「現在及び将来の学習と自己実現とのつながりを考えたり、自主的に学習する場としての学校図書館等を活用したりしながら、学ぶことと働くことの意義を意識して学習の見通しを立て、振り返ること」と明記されており、自己実現を図る上でも図書館等を活用する重要性がうたわれています。

また、学校においては、このような図書館教育に期待されている役割が最大限に発揮できるようにすることが重要であり、学校図書館が児童・生徒にとって落ち着いて読書を行うことができる、安らぎのある環境や知的好奇心を醸成する開かれた学びの場としての環境として整えられるように努めることが大切であると考えられます。平成２８年１１月に文部科学省より出された「学校図書館ガイドライン」においても、「学校は、学習指導要領等を踏まえ、各教科等において、学校図書館の機能を計画的に利用し、児童・生徒の主体的・意欲的な学習活動や読書活動を充実するよう努めることが望ましい。」とされ、校長のリーダーシップの下、学校図書館に関する全体計画に基づき、教職員が連携して、計画的・組織的に学校図書館の運営に当たっていくことが求められています。

そのような中、これまで本学校図書館部会では、学校図書館の役割の充実や各校における読書活動の推進に向け、県内各地区で、様々な研究や取組を行ってまいりました。今回の県北大会では、大会主題を「豊かな心と学びを育む学校図書館」として掲げ、６つの分科会を設定し、学校図書館の活用や各校における読書活動の推進、地域や関連機関との連携等の視点から各地区の発表とそれに伴う協議を行います。これらを通して、今後、県内各学校図書館の活用と児童生徒の読書活動の充実がさらに図られますことを心より願っております。

最後に、本大会の開催に当たり、準備や大会の運営にも携わっていただいている開催地区の関係者の皆様、忙しい中、研究を進めてくださった発表者の皆様に心より、お礼を申し上げます。加えて、これまでご指導・ご支援を賜りました宮崎県教育委員会、延岡市教育委員会、日向市教育委員会、その他関係の皆様方に深く感謝を申し上げ、あいさつといたします。

令和6年度 宮崎県学校図書館教育研究大会県北大会

1 期　日　　令和6年8月8日（木）

2 会　場　　**延岡市カルチャープラザのべおか（宮崎県延岡市本小路 39 番地 1　電話 0982-34-6549）**
延岡市社会教育センター　　（宮崎県延岡市本小路 39-1　　電話 0982-22-7032）

3 主　催　　宮崎県学校教育研究会図書館教育部会

4 後　援　　宮崎県教育委員会　延岡市教育委員会　日向市教育委員会 五ヶ瀬町教育委員会
門川町教育委員会　　美郷町教育委員会　　諸塚村教育委員会　日之影町教育委員会
椎葉村教育委員会　高千穂町教育委員会

5 大会主題　　**「 豊かな心と学びを育む学校図書館 」**

6 大会趣旨

学校図書館は、児童生徒の読書活動や読書指導の場である「読書センター」としての機能、学習活動を支援したり授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする「学習センター」としての機能を有している。また、児童生徒や教職員の情報ニーズに対応したり、児童生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」としての機能も有している。さらに、学校図書館には変化する社会情勢を踏まえ、「児童生徒の心の居場所」、「家庭・地域における読書活動への支援」等の機能を果たすことも求められており、「教員の授業改善や資質の向上」の観点からの重要性も踏まえ、学校図書館が果たすべき役割は年々、多様化が進んでいるといえる。

現在、 宮崎県は「読書県づくりの推進」を掲げ、行政、地域、図書館、学校、家庭等が連携を図りながら全県的な取組を行っている。

このような中、本研究大会では今後の学校図書館のあるべき姿、読書教育の在り方等について協議を深めることで本主題に迫っていきたいと考える。

7 日程

時 間	13:00 ～13:30	13:30 ～13:50	14:05 ～ 16:05	16:05 ～16:15
分	（30）	（20）	（120）	（10）
内 容	受 付	開会行事	研究発表・研究協議 （休息を含む）	閉会行事
会 場	延岡市カルチャープラザのべおか	延岡市カルチャープラザのべおかハーモニーホール	延岡市社会教育センター	延岡市社会教育センター

8 分 科 会（14:05～16:05）

分科	協議題	発表者	司会者	記録者	指導助言者
第１ 分科会	A 魅力的な学校図書館づくり	加納小学校 教諭 本田妃佐喜 穂北中学校 教諭 中里美紀	北方学園 教頭 金澤由紀子	北方学園 教諭 松本 沙織	県教育庁北部教育事務所 指導主事 大田川真志
第2 分科会	B 学習情報センターとしての学校図書館の活用	通山小学校 教諭 佐野志織 永久津中学校 教諭 松下良子	土々呂中学校 教頭 大石 彰	東小学校 教諭 村田 葵	県教育庁中部教育事務所 指導主事 有田 雅代
第3 分科会	C 学校における読書指導	山之口小学校 教諭 梅元杏華 西岳中学校 教諭 稲元 愛	東小学校 教頭 上米良 剛	南方中学校 教諭 舟津 淳子	県教育庁南部教育事務所 指導主事 前田 雅樹
第4 分科会	D 特別支援教育における読書活動	学校図書司書 多田明子 南郷中学校 教諭 外林義朗	恒富小学校 教頭 武田啓宏	南中学校 教諭 中田 晃喜	県教育庁北部教育事務所 指導主事 緒方 宏文
第5 分科会	E 学校司書・司書教諭の役割	国富小学校 教諭 河野歩美 広瀬中学校 教諭 有田桂子	西小学校 教頭 島 和	黒岩小学校 教諭 木下奈緒子	県教育庁義務教育課 指導主事 川﨑 優也
第6 分科会	F 地域・家庭・公共図書館との連携	北川小学校 教諭 泉美麻里 島野浦学園 教諭 甲斐聖佳 宮崎商業高校 教諭 厚地晃子	東海東小学校 教頭 黒木正大	緑ヶ丘小学校 教諭 甲斐由利子	県教育研修センター 社会教育主事 楠本 将夫

【分科会の時間配分】

	進行 説明	発表1 （質疑含む）	発表2 （質疑含む）	発表3 （質疑含む）	休息	協議	指導 講評
第１～5 分科会	14:05～ 14:10	14:10～ 14:35	14:35～ 15:00		15:00～ 15:10	15:10～ 15:55	15:55～ 16:05
第６ 分科会	14:05～ 14:10	14:10～ 14:30	14:30～ 14:50	14:50～ 15:10	15:10～ 15:20	15:20～ 15:55	15:55～ 16:05

県北大会　発表者一覧

	研究項目・内容	発表者	ページ
第1分科会	「魅力的な学校図書館づくり」 ～各学校における読書指導の実践を通して～	宮崎市立加納小学校 （日向市立財光寺南小学校） 教諭　本田妃佐喜	5～6
	「魅力的な学校図書館づくり」 ～豊かな心と学びを育む学校図書館～	西都市立穂北中学校 教諭　中里　美紀	7～8
第2分科会	「学習情報センターとしての学校図書館の活用」 ～教科の学習内容を深めるための 学校図書館利用を通して～	川南町立通山小学校 教諭　佐野　志織	9～10
	「学習情報センターとしての学校図書館の活用」 ～学習情報センターとしての学校図書館の活用～	小林市立永久津中学校 教諭　松下　良子	11～12
第3分科会	「学校における読書指導」 ～学校における読書指導を通して～	都城市立山之口小学校 教諭　梅元　杏華	13～14
	「学校における読書指導」 ～１年間を見通した計画的な読書指導を通して～	都城市立西岳中学校 教諭　稲元　愛	15～16
第4分科会	「特別支援教育における読書活動」 ～競い合う読書から認め合い・学び合う読書へ～ Well-being　特別支援教育の視点で、 学校図書館の機能をＯＮにする	（株）共立ソリューションズ 学校図書司書　多田　明子	17～18
	「特別支援教育における読書活動」 ～特別支援教育の視点に立った読書指導の充実～	日南市立南郷中学校 （日南市立北郷小中学校） 教諭　外林　義朗	19～20
第5分科会	「学校司書・司書教諭の役割」 ～図書主任の役割と学校司書との連携の在り方～	宮崎市立国富小学校 教諭　河野　歩美	21～22
	「学校司書・司書教諭の役割」 ～図書主任の役割と読書活動アシスタント との連携の在り方～	宮崎市立広瀬中学校 教諭　有田　桂子	23～24
第6分科会	「豊かな心と学びを育む学校図書館」 ～地域･家庭･公共図書館との連携を通して～	延岡市立北川小学校 教諭　泉美　麻里	25～26
	「豊かな心と学びを育む学校図書館」 ～地域･家庭･公共図書館との連携を通して～	延岡市立島野浦学園 教諭　甲斐　聖佳	27～28
	「地域･家庭･公共図書館との連携」 ～「本」に関わるボランティアを通して～	宮崎県立宮崎商業高等学校 教諭　厚地　晃子	29～30

第１分科会「魅力的な学校図書館づくり」
～各学校における読書指導の実践を通して～

日向市立財光寺南小学校（宮崎市立加納小学校）　教諭　本田　妃佐喜

１　はじめに

日向市には、１４の小学校と８校の中学校があり、その小中学校で図書主任会を構成している。取組や実践について情報交換し、「魅力ある学校図書館づくり」について研究を進めてきた。市内の小学校の全児童を対象に、５月と１１月で読書への意識調査を行ったところ、読書の楽しさや大切さを感じる児童が多いことが分かった。一方で、利用頻度の個人差を改善することや蔵書の充実を図る必要性を感じた。

２　主題設定の理由

学校図書館は、児童生徒の興味・関心に応じて自発的・主体的に読書や学習を行う場、読書等を介して創造的な活動を行う場である。そのため、学校図書館は落ち着いて読書できる安らぎのある環境や、知的好奇心を醸成する開かれた学びの場としての環境を整えることが望ましい。また、学校図書館は教室での固定された人間関係から離れ、一人で過ごしたり様々な人々との関わりをもつことができたりする場である。児童が学校図書館を校内における「心の居場所」としていることも少なくない。そこで、「学校図書館に親しむ」ことが、「学びを支える」「心を支える」ことにつながると考えた。

３　研究目標

魅力ある学校図書館をつくっていくために、読書環境の整備や読書活動を推進することで、意図的に学校図書館の利用者を増やし、本や読書への興味・関心を高める。

４　研究の仮説

校内の教職員や司書、委員会児童と連携しながら、魅力的な学校図書館づくりに向けて様々な取組を行えば、学校図書館に来館する児童が増え、本や読書に興味をもち心のオアシス的な居場所として提供できるのではないか。

５　研究の実際

（１）　読書量を増やす取組

毎月の図書館イベントとして、毎月図書カウンターの横に季節の本を提示したり、カウンター横の「わくわくコーナー」で毎月クイズや今月の催しを知らせたりした。

また、市立図書館「みんなでつなごう！ブックバトン」と連携させた取組では、学校図書館にブックバトン作成コーナーを設け取り組んだ。他には、「みんなに読んでほしい本」と題して、６年生のおすすめの本をＰＯＰで紹介した。

（２）　経営の工夫

掲示の工夫では、学校図書館の入り口に、毎週の図書の貸出冊数を数字とともにグラフで表示した「読書メーター」の掲示や、季節を感じる掲示、「今月の言葉遊び」としていろいろな言葉や文章を掲示した。また、時期によって設定したテーマに関連した本を並べるコーナーを学校図書館内に設けた。

配架の工夫では、新刊、図書委員会によるおすすめの本、国語の教科書で紹介されている本等について紹介や設置を行った。

（３）　委員会活動での取組

学校図書館内には、年度初めに委員会児童で設定した１年間の目標貸出冊数を掲示

した。また、「図書委員会や職員による読み聞かせ」、「読書ビンゴゲーム」、「塗り絵コンテスト」、図書キャラクターの募集」等の図書委員会によるイベントの実施、運営を行った。

（４）　選書の工夫

児童が「読みたい」と思う本を一冊でも多く図書室に設置し、より児童の読書への意欲を向上させるために、児童の貸出傾向を基に選書を行った。また、選書会では、複数の本を実際に開き見比べながらより読みやすい本選びに努めた。

6　児童への意識調査

（１）　図書貸し出し冊数の調査結果

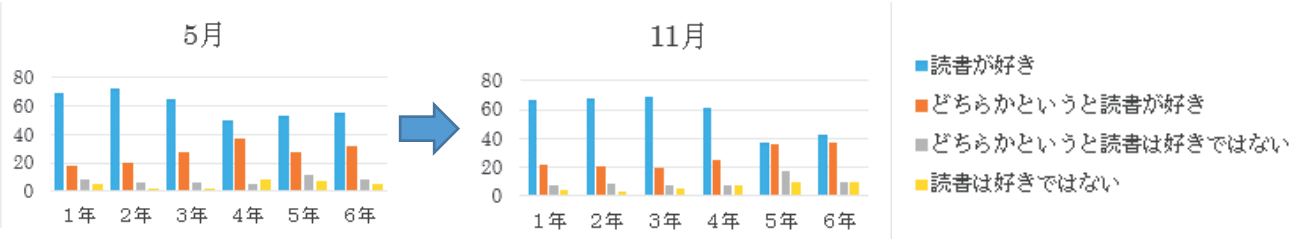
【５月】

学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	合計
児童生徒数(人)	402	417	453	460	472	488	2692
総貸出冊数(冊)	3797	2953	2435	2844	1751	3412	17192
平均貸出冊数(冊)	9.4	7.1	5.4	6.2	3.7	7.0	6.4
一冊も読まなかった児童数(人)	8	4	23	9	59	48	151
不読者率(%)	2.0	1.0	5.1	2.0	12.5	9.8	5.6

【１１月】

学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	合計
児童生徒数(人)	400	427	446	459	458	483	2673
総貸出冊数(冊)	5939	4402	4842	5419	2428	2435	25465
平均貸出冊数(冊)	14.8	10.3	10.9	11.8	5.3	5.0	9.5
一冊も読まなかった児童生徒数(人)	0	2	4	7	4	14	31
不読者率(%)	0	0.5	0.9	1.5	0.9	2.9	1.2

（２）　読書に対する児童の意識調査の結果



（３）　図書貸出冊数調査及び読書に対する児童の意識調査の結果から分かること

５月と１１月を比較すると、総貸出冊数が８２７３冊と、４８％増加した。また、平均貸出冊数は一人６．４冊から９．５冊に増加した。そして、１ヶ月１冊も読まなかった児童は１５１人から３１人に減少し、不読者率が５月から４．４％減少した。しかし、高学年に限定するとその人数は増加した。読書に対する意識調査では、中学年で「読書が好き」「どちらかというと読書が好き」という児童が増加した。

7　成果と課題

（１）　成果

○　新刊コーナーの本や図書委員おすすめの本等を提示することで、本に興味をもち学校図書館を利用する児童が増加した。

○　児童がどのような本に興味をもっているかを把握することで、選書に活かすことができた。

○　図書委員会の児童を中心に児童主体のイベントを実施することで、楽しく来館できる雰囲気をつくることができた。

（２）　課題

●　学校図書館の魅力的な環境整備をし、利用しない児童に働きかける必要がある。

8　おわりに

読書は心の栄養となり考える力の源となる。本との出会いや子どもたちの「本が好き」「もっといろんな本を読みたい」という思いを大切にし、様々な実践を参考にしたり情報を収集したりしながら、より利用しやすい魅力ある学校図書館作りに努めていきたい。

第１分科会「魅力的な学校図書館づくり」
～豊かな心と学びを育む学校図書館～

西都市立穂北中学校　教諭　中里　美紀

１　はじめに

本校は、令和８年度に西都中学校に統合され閉校することが決定している。西都市内の銀鏡中学校以外の妻中学校、穂北中学校、都於郡中学校、三財中学校、三納中学校の５校が西都中学校になる予定である。西都市内の中学校では、情報を共有しながら、統合後の学校図書館の運営がスムーズにいくように、また現在の学校図書館の利用の促進も考えながら学校図書館の運営にあたっている状況である。さらに、三財中学校、三納中学校、銀鏡中学校については、小学校と同じ校舎になっており、図書委員会の活動も小学生と一緒にしたり、交替でしたりしている状況である。生徒数が少なく、活動できる生徒も限られている。こういう状況ではあるが、それぞれの学校の規模、状況に合わせて生徒たちにとって図書館が魅力的な場所となるように活動を進めている。

２　主題設定の理由

生徒の読書活動を充実させていくためには、学校図書館が生徒にとって魅力的な場所になるようにしていく必要がある。しかし、学校図書館のスペースは限られており、図書の充実を図りながらも、同時に廃棄も進めていかなければならない。令和８年度に現在の妻中学校の校舎で西都中学校がスタートするのであれば、各学校の蔵書を全て運び込むことは不可能であるため、さらに廃棄を進める必要がある。そこで、効率的に廃棄を進め、厳選された蔵書の中で、生徒たちが学校図書館を魅力的な場所と感じ、豊かな心と学びを育む場所となれるよう本主題を設定した。

３　研究目標

学校図書館の蔵書を整理し、生徒にとって魅力的な場所にすることで、学校図書館の利用者を増やし、生徒の豊かな心と学びを育む。

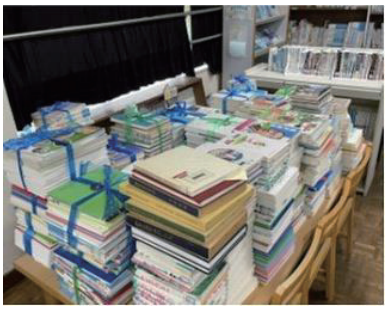
４　研究の仮説

学校図書館にある蔵書を整理し、廃棄することでスペースが生まれ、配置、掲示等を工夫することで、学校図書館が生徒にとって魅力的な場所になるだろう。

５　研究の実際

（１）　蔵書の整理

西都市内の中学校は全校、統合後の中学校に蔵書を移すことができないことや、書庫にかなり古い本があり、新しい本を置くスペースがなくなってきているため、古い本の廃棄を大々的にする必要があった。夏休み中の職員作業として廃棄する本の選定を行った。廃棄することで書庫に余裕が生まれ、新刊コーナーを作るなど、手に取りやすい位置や置き方を工夫することができた。



（２）　配置の工夫

どこにどういった本があるのかが分かりやすいように、本棚の上部に番号やジャンルを掲示したり、作家ごとに本をまとめて区切ったりなどの取組を行っている。

（３）　掲示の工夫

ア　学校図書館入り口の掲示

図書館の窓や図書館の出入り口などに、季節感のある飾りつけや新刊本のお知らせなどのＰＯＰを掲示し、生徒が図書館に入りたくなるような雰囲気を作っている。また、出入り口に本年度の貸し出し冊数と、貸し出しの目標冊数を掲示した。貸し出しの目標冊数を意識することで図書館利用者が増えると考えている。

イ　おすすめの本のコーナー

国語の教科書に出てくる本を集めたコーナーやおすすめの本のコーナー（季節や行事などに関する本）、新刊本のコーナーなど、生徒がいろいろな図書に興味をもつようなコーナーを作っている。

（４）　読み聞かせの実施

さらに魅力的な場所づくりとして、昼休みの図書館で図書委員会よる読み聞かせを実施した。小中一貫校では、小学生が興味をもちそうな本を中学生が選び実施した。小学生は、中学生がどんな本を読んでくれるかを楽しみにし、中学生は、たくさんの本の中から小学生が喜びそうな本を選ぶことで、さまざまな本に触れる機会になっている。

6　成果と課題

古い本も多くスペースが足りなくなっている状態であったが、中学校の統合というきっかけもあり、今回大規模な廃棄を行うことで、学校図書館が広く明るい場所になり読書に親しむための場所をつくることができた。

（１）　成果

○　古い本を廃棄することで、新しい本を手に取る生徒が増えた。

○　図書館出入り口の掲示を工夫することで、今まで図書館に入ったことのない生徒の来室のきっかけになった。

（２）　課題

●　西都市は小規模校が多く、図書委員会の活動を活発にしようとしても限界がある。地道な取組を継続していくことに注力したい。

●　閉校後の蔵書の移管のこともあり、廃棄についてもっと進めていく必要がある。

7　おわりに

今回の研究を通して、図書の廃棄についての情報交換や図書の購入についての情報共有を行うことができた。今後も図書主任が連絡を取り合い中学校の統合に向けて協力していくことが大切であると感じた。

第２分科会「学習・情報センターとしての学校図書館の活用」
～教科の学習内容を深めるための学校図書館利用を通して～

川南町立通山小学校　教諭　佐野　志織

１　はじめに

本研究は、川南町５校、都農町３校、計８校の小学校が合同で行ったものである。

川南町は、町立図書館が役場の近くにある。読書感想画や本を活用した調べ学習のコンクールが毎年開催されており、地域の児童が本に親しみやすい環境である。また、それぞれの小学校の図書館には、川南町から毎週２日、２人の図書事務員が輪番で配属されており、学校間での連携が取りやすい。

都農町では、小学校で町民図書館の本を借りることができる「移動図書館」を行っており、町民の図書館利用や読書活動の推進につながっている。また、週１日図書支援員が各校を巡回し、図書館の充実を図っている。

２　主題設定の理由

児童は、学校図書館に対して、読書をしたり本の貸し出しを行ったりする場所という意識が強い。文部科学省によると、学校図書館は、「児童生徒の想像力を培い、学習に対する興味・関心等を呼び起こし、豊かな心をはぐくむ、自由な読書指導の場である『読書センター』としての機能」である。一方、「学習・情報センター」とは、「児童生徒の自発的、主体的な学習活動を支援するとともに、情報の収集・選択・活用能力を育成して、教育課程の展開に寄与する」ものとしている。

（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/08092920/1282744.htm）　2024/06/02

そこで、本研究では、主に国語科・社会科・生活科を中心とした、教科の学習で効果的に学校図書館を活用することで、学校図書館が「学習・情報センター」としての機能を果たすのではないかと考え、本主題を設定した。

３　研究目標

学校図書館の本を活用することで、児童の学習内容理解を深めることができる。

４　研究の仮説

- 単元の中で学校図書館を利用する学習時間を設けることで、活用する目的が明確になるだろう。
- 教科の内容と連動した学校図書館の利用を図ることで、学習内容の理解を深めることができるだろう。

５　研究の実際

（１）　国語科における学校図書館の利用

ア　各学年の活用

１年生	「じどう車くらべ」「どうぶつの赤ちゃん」
２年生	「どうぶつ園のじゅうい」、アーノルド・ローベルの本を読む
３年生	図書館の利用の仕方
４年生	百科事典の調べ方、「伝統工芸のよさを伝えよう」、「もしものときにそなえよう」、「自分だけの詩集を作ろう」
５年生	「この本、おすすめします」
６年生	「日本文化を発掘しよう」

イ　指導内容

教科書で本文を学習後、学校図書館の本を利用して、調べ学習を行った。調べた内容は、絵や文などでまとめた。また、学習した物語文の作者に関連した本を探して読んだり、児童間で読み聞かせを行ったりした。

（２）　生活科（１・２年生）・社会科（３～６年生）における学校図書館の利用

ア　各学年の活用

１年生	秋の植物調べ
２年生	生き物調べ、おもちゃの作り方調べ
４年生	「地域の発展につくした人々」、「自然災害から人々を守る」

イ　指導内容

生活科では、教科書では足りない情報や知識を本で調べた。社会科では、学習内容に関連した調べ学習を行い、新聞や画用紙にまとめた。

（３）　その他の取組

ア　総合の学習

３年生	地域の生き物調べ
４年生	福祉関係の調べ学習、キャリア教育
５年生	米の作り方
６年生	キャリア教育、SDGｓについての学習

イ　学校間での情報の交換

川南町の小学校では、１１月の読書月間に合わせて、各学校の図書委員がおすすめの本紹介カードを書き、学校間で交換した。他の学校の児童が書いた紹介カードを学校図書館に掲示することで、同じ本があるか探したり、読んだりしていた。

ウ　図書選定の工夫

新しく購入する本を、学級担任に選定してもらった。授業や児童の学習で活用しやすい本を中心に選定した。

６　成果と課題

（１）　成果

○　これまで９分類の本を手に取っていた児童が多かったが、他の分類の本を借りたり読んだりするようになった。

○　友達と自分が調べた内容が異なるため、児童同士の意見交流が活発になった。

○　自分の知りたい内容や学習の目的に応じて、本を吟味できるようになった。

（２）　課題

●　学校図書館を利用しやすい単元に偏りがあった。

●　学校図書館の蔵書数に限りがあるため、指導者が事前に見通しをもって公立の図書館から貸し出しを行うことが必要だった。

●　利用の仕方には個人差があるため、継続した利用と指導が必要である。

●　学校図書館の蔵書が古いものが多いが、予算等の関係で新刊図書が入りにくいため、最新の情報が得にくい。

７　おわりに

児童の意識が変わっただけではなく、指導する教員も、学校図書館を利用しながら授業を行うことができるようなった。今回は本を利用した学習を研究したが、これからの時代はインターネットの利用は欠かせない。インターネットと本の両方を「学習情報」として上手に活用できる児童の育成ができるよう、充実した図書館づくりを目指したい。

第２分科会　Ｂ　学習情報センターとしての学校図書館の活用

「豊かな心と学びを育む学校図書館」
～　学習情報センターとしての学校図書館の活用　～

小林市立永久津中学校　教諭　松下　良子

１　はじめに

西諸県地区は、小林市、えびの市、高原町の２市１町からなる、自然豊かな地域である。本地区には小学校２１校、中学校が１５校、計３６の学校があり、児童生徒はのびのびと学校生活を送っている。学校と地域の結び付きは強く、学校行事や地域の行事を通して児童生徒と地域の人々と交流する機会も多い。そうした体験は子どもたちの心の成長につながっている。市内の公立図書館は蔵書や設備も充実しており、毎年「読書まつり」等も開催されている。

しかし、交通事情等から市立図書館を利用できない地区の児童生徒は多く、その点からも学校図書館に求められる役割は大きいと言える。

２　主題設定の理由

文部科学省のガイドラインに示されているように、学校図書館は、「読書センター」「学習センター」「情報センター」としての機能をもち学校に欠かすことのできない施設である。

令和３年度の全国学力・学習状況調査において、「家庭の蔵書数が多いほど、正答率が高い」「読書量と学力との関係性は高い」ことが指摘された。しかし、近年の急速な情報化社会の発展に伴い、子どもたちの興味関心は、本よりもＳＮＳ、YouTube などの動画に大きく移行し、「読書離れ」が加速しているという現実がある。学校教育においても、個別最適な学びを実践する上で、タブレット等のＩＣＴ活用は必須となっているが、児童生徒の心と学びを育むためには読書は必要不可欠である。つまりは現代社会に生きる児童生徒が魅力を感じ、彼らの求めに応えることのできる「学習情報センターとしての学校図書館」の活用が重要であると考え、本主題を設定した。

３　研究の実際

（１）　授業における積極的な学校図書館の活用

①　資料収集計画表の作成

年間を見通した図書館にある資料の活用を行うために資料収集計画表を作成した。資料収集計画表とは、教師が授業で図書館の資料を活用したいと思う教科や単元を記入したものである。さらに「資料収集　内容の詳細」というシートを作成し、これをもとに、図書担当事務職員が資料を準備し、授業での資料の活用につなげるようにした。

②　教科及び総合的な学習の時間での活用

ア　国語科での活用

中学１年生で学習する表現技法を学校図書館にある本から探して見つけるという活動、「詩の世界」という単元でお気に入りの詩を見つけて紹介するという活動等を行った。特に、詩を探して紹介する活動では、おそらく普段中学生が読むことはないであろう作品に触れさせることも目的とした。

３年生の「論語」では、図書館の論語に関係する本から、紹介したいまたは座右の銘にしたい言葉を探しまとめるという活動を行った。「これ、孔子の言葉だったのか」と改めて言葉の意味を実感する機会にもなった。

同じく３年生の「俳句」の授業において、俳句の情景をイメージし、図書館の資料とタブレット端末を併用して季語について調べ、俳句を作る活動を行った。

イ　家庭科での活用

中学３年生の家庭科（保育）の授業において「幼児向けの絵本を作る」活動

を行った。学校図書館にある絵本から魅力を感じる作品を１冊選び、優れている点はどこなのかを観察し、タブレット端末での絵コンテ作りも取り入れ、絵本作りを行った。生徒は、学習した「幼児の発達」も考慮しながら、じっくりと絵本を鑑賞し、作品作りに生かしていた。

ウ　総合的な学習の時間での活用

修学旅行での見学地について、学校図書館の資料を活用して調べ学習を行なった。タブレット端末を使用した方が早く調べられる場合もあるが、さまざまな情報収集の方法を学ぶという観点からも、あえて図書館の資料を活用させた。生徒は、本とタブレットの情報を比較することで、それぞれの利点や問題点を見つけることができた。

（２）　学校図書館の資料準備と充実

①　児童生徒が興味を高めるコーナーの設置

季節の行事、防災、スポーツ、職業、部活動、料理などさまざまな分野の本を紹介するコーナーや、教科書で採用されている作品など、児童生徒が魅力的に感じるであろう本と、教諭や図書協力員が薦めたい本を紹介するコーナーを設置し、児童生徒の読書の幅が広がる工夫をした。

また、昼休み等に視聴できる「ＤＶＤコーナー」や新聞記事をスクラップできるコーナーを設け、図書館をさまざまな情報収集ができる場とした。

②　図書設置の場の工夫

学校図書館以外の場所にも図書の本を設置し、児童生徒が自由に手に取れるようにした。学級文庫コーナーを設けたり、国語辞典や漢和辞典を各教室に置いたり、廊下やフロア等のスペースにコーナーを設け、児童生徒の「読みたい、調べたい」という希望がすぐに叶えられるように工夫を行った。

③　検定試験の学習の場としての工夫

漢字検定や英語検定の学習の場として、各級の問題集や参考書を並べ、生徒が自由に閲覧し、学習できるための工夫をした。

④　協力員との連携による学校図書館の整備

書架の整理や館内の整備等を学校図書協力員と連携して行うことで館内の設備の充実を図るようにした。

学校図書館での過ごし方や図書の返却期日について等の指導も、図書担当教諭と協力員が連携して行うことで、児童生徒への周知徹底が図られ、学びの場にふさわしい雰囲気を作ることができた。

４　成果と課題

（１）　成果

①　学習情報センターとしての学校図書館を意識して活動することで「図書室は楽しい場所、便利で魅力的な場所」という捉え方が児童生徒に広まり、利用者の増加につながった。

②　学習情報センターとしての学校図書館を周知する工夫をしたことで、さまざまな場面で図書室が利用されるようになり、児童生徒の情報交換や交流の場面も見られるようになった。

（２）　課題

①　図書館担当以外の職員に対し、学習情報センターとしての学校図書館の活用を喚起する必要がある。

②　今後も協力員及び地域の図書館と連携し、環境整備等を図る必要がある。

５　おわりに

今回の研究を通し、本地区における学校図書館の役割の大きさを改めて感じることができた。今後もより充実した図書館運営を目指したい。

第３分科会「豊かな心と学びを育む学校図書館」
～学校における読書指導を通して～

都城市立山之口小学校　教諭　梅元　杏華

１　はじめに

本地区では、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」や、県の「宮崎県生涯読書活動推進計画」の趣旨を踏まえた基本方針を示している。その中で、学校は各教科等を通した多様な読書活動が展開される場として、児童の読書活動推進の一環を担っている。そこで、図書主任会のおりに、各校の取組や実践について情報交換をしながら、図書館運営や読書指導の充実を図っている状況である。

２　主題設定の理由

同地区であっても、学校によって、児童数や学校図書館の環境、司書教諭や図書館サポーターの配置など、抱えている実情は様々である。そこで、多様な取組や実践の内容を共有する際の共通目標として、「豊かな心と学びを育む学校図書館」という主題を設定した。

３　研究目標

豊かな心と学びを育む学校図書館　～学校における読書指導を通して～

４　研究の仮説

明確な視点をもとに各校の取組や実践について整理・共有し、実践内容をより深めたり新たな取組を加えたりすれば、学校における図書館運営や読書指導のさらなる充実と児童の読書活動の推進を図ることができるであろう。

５　研究の実際

（１）　読書活動の工夫

ア　読書時間の設定

全校児童が一斉に読書に取り組む時間を確保するために、校時程に読書の時間を組み込んだり、読み聞かせの機会を設定したりしている。読み聞かせ活動は、保護者や地域ボランティアによる定期的なものや、図書館サポーターによる給食時間の放送、学級担任によるものなど、様々な形態で行われている。また、「家庭読書の日」を実践し、読書を通した家庭との連携を図る取組も行われている。

イ　学校図書館の環境整備

学校図書館内に、各学年の国語科の学習に関連した本を集めたコーナーを設けたり、新聞を置いたりすることにより、各教科等の学習をより深める手立てとしている。さらに、「くれよん号」の本を活用しながら、定期的に本の入れ替えを行う学校もある。

ウ　読書履歴の視覚化

児童それぞれがこれまでに読んだ本の記録として、「読書貯金通帳」を作成している学校がある。読書の足跡を児童自身が認識する手立てとなっている。

（２）　図書館利用が活性化するための手立て

ア　貸出冊数を増やすための取組

一定数の貸出冊数に到達するともらえる「１冊プラス券」の配付や、学期末・学年末に「多読賞」の児童を表彰する取組により、児童の図書館利用に対する意

欲が向上している。

イ　親しみのある学校図書館にするための取組

児童にとって図書館が身近で親しみのある場所となるよう、図書館内における本のポップや各コーナーの設置、図書館近辺の掲示を工夫している。さらに、「図書館だより」を発行している学校もある。

（３）　学期ごとの読書活動（イベント）の工夫と推進

ア　学校行事や季節に合わせた図書館イベントの実施

季節や学校行事にちなんだイベントを企画することで、児童の図書館利用が増加する傾向が見られる。

【読書玉入れ（祝吉小）】

【あじさい読書（山田小）】

イ　児童が読書の幅を広げることを意図したイベントの実施

児童が様々なジャンルの本に触れることや、本の分類を知ることを目的としたイベントを企画している。

（４）　図書館サポーターとの連携

年度初めの学校図書館オリエンテーションによる図書館利用の指導や図書館の掲示、イベント企画・実践を中心に、図書館サポーターとの連携を図っている学校が多い。また、学級担任が授業に関連する本の収集依頼をすることで、児童が学習内容を深めたり広げたりすることができる。

6　成果と課題

（１）　成果

○　各学校での取組を共有することで、自校の取組の参考にすることができ、地区全体における児童の読書活動推進につながった。

○　項目を整理しながら学校における読書指導を見直すことで、意図的視点をもって児童の読書活動に対する手立てについて考えることができた。

（２）　課題

●　ほとんどの学校において、共有した実践の中心となっているのは図書主任や図書館サポーターなど一部の職員であり、学校全体で効果的な読書指導に取り組むための教職員の学びの機会が確保できていない。

●　学校の規模や図書館サポーターの配置状況により、取組が制限される学校もあるため、共有した取組の中から自校に合ったものを選び、工夫を加えながら実践する必要がある。

7　おわりに

今回の研究を通して、各学校の取組について情報交換を行うことにより、同地区内での読書指導の現状を把握し、今後の参考にすることができた。一方で、教職員が読書指導について学ぶ機会が少ないという課題や、各学校が抱える問題点も見えてきた。豊かな心と学びを育む学校図書館という共通目標のもと、今後も取組や実践の共有を継続するとともに、課題解決の方法も検討していきたい。

第３分科会「学校における読書指導」
～１年間を見通した計画的な読書指導を通して～

都城市立西岳中学校　教諭　稲元　　愛

１　はじめに

本校は、都城市西方の山間部に位置する、全校生徒１７名の小規模校である。教室数が少ないため「図書室」が単体で設置されておらず、多目的教室に書架を並べて利用している状況ではあるが、人数に対して蔵書は充実している。また、小学校では「くれよん号」を利用しており、生徒たちは本に親しむ環境の中で育ってきたといえる。

都城市全体としては図書館サポーターの配置が進んでおり、その専門性を活かす機会の創出や、教員・図書館サポーター間の連携による読書環境の充実が望まれるところである。

２　主題設定の理由

生徒を対象としたアンケート調査の結果、「あなたは読書が好きですか」という質問に対しては、半数以上の生徒が「とても好き」・「どちらかと言えば好き」と肯定的な回答をしたにも関わらず、ほとんどの生徒は中学校に進学したことを機に読書量が減ったと答えている。また、その理由としてほとんどの生徒が「時間がない」と答えた。また、「どのようなジャンルの本が好きですか」という質問に対しては、半数以上の生徒が「物語・小説」と回答し、「どのような本が読みたいですか」という設問に対しては「短編がたくさん載っている本」、「絵が載っている本」など、内容が簡単で手に取りやすい本を好んでいることが分かった。このようなことから、読書機会の確保や、本を手に取るきっかけになるようなイベントの実施、読書の幅を広げる工夫を図書館サポーターと連携して計画する必要があると考えた。

３　研究目標

１年間を通じて計画的に読書指導を行い、生活の中で読書に親しむ態度を培う。

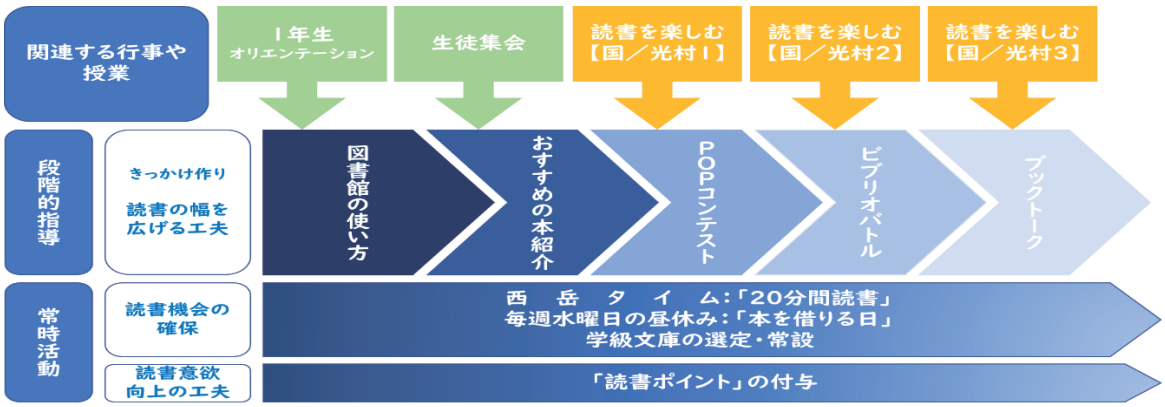
４　研究の仮説

読書に親しむきっかけ作りや読書時間の確保、読書の幅を広げる読書指導を図書館サポーターと連携して、段階的・計画的に行えば、生活の中で読書に親しむ態度が培われるであろう。

５　研究の実際

（１）　１年間を見通した読書指導計画の立案

計画的に読書指導を行うために、１年間の指導計画を立てた。段階的に活動の強度が上がるように、また、関連のある授業の単元や学校行事を絡めて効率的に指導できるようにした。「おすすめの本紹介」に関しては、職員に紹介を依頼した。また、放課後２０分間の「西岳タイム」を活用した読書活動も師弟同行で実施し、教員という身近な存在への興味が読書への興味へ移行するように工夫した。また、貸出時に本に関する助言が得られるよう、図書館サポーターが来校する水曜日を図書の貸出日に設定した。



（２）　図書館利用が活性化するための手立て

広く都城地区内から情報を集めた結果、図書館利用の活性化に向けて右記のような取組をしている学校が多くあった。いずれも、図書館へ通うきっかけ作りとして有意義な活動となっている。

・図書委員による購入本の選本
・季節や行事に応じた特設コーナーの設置
・学年ごとの読書量が分かる掲示物の作成
・教員によるおすすめ本紹介
・ポップコンテストの実施
・図書館まつりの実施

（３）　図書館サポーターとの連携

十進分類法に基づく図書館の整備や本の探し方の紹介、壊れた本の修復や保護など、専門的な知識を生かした業務を担っている。また、（２）に挙げた図書館のレイアウトや諸イベントの実施について、教諭のみでは手が行き届かない部分をサポートしてもらっている。設営や企画が大変充実し、生徒にとっても「通いやすい図書館」となっている。

６　成果と課題

（１）　成果

○　段階を踏んだ指導と常時活動を併せて計画的に実施したことにより、常に読書に親しむ環境を作ることができた。

○　令和５年度の貸し出し冊数（５０９冊）は、令和４年度の貸し出し冊数（１２７冊）を大幅に上回った。

○　図書館サポーターと連携し、読書への関心を高めるための図書館設営やイベントの企画運営ができた。

（２）　課題

●　読書の幅や機会を拡充し、生涯読書に親しむ環境をつくるためにも、市や県の図書館利用を検討していく必要がある。

●　図書館サポーターについては学校の配置状況に差があるため、密に連携し、その職能を活かす取組の充実を図りたい。

７　おわりに

この研究を通して、年間を見通して計画的に読書指導を行えば、読書に親しむ生徒を育成できると感じた。小学校までで育まれている「読書が好き」という気持ちを中学校でさらに育て、人生の要所要所で心の拠り所となり、また、生き方のヒントをくれ、想像力の翼を与えてくれるのが本であることを、生徒に感得させたい。今後も計画的に指導を行うと共に、学校外の機関や図書館サポーターなどの専門家と連携することで、生涯読書に親しむ姿勢を培いたい。

第４分科会「Ｄ　特別支援教育における読書活動」

「　競い合う読書から　認め合い・学び合う読書へ　」

～Well-being　特別支援教育の視点で、学校図書館の機能を ON にする～

日南市学校図書司書　多田　明子

１　はじめに

「海幸山幸」の神話を、今も伝える鵜戸神宮と潮獄神社。光きらめく日南海岸。美しい杉林の中にたたずむ飫肥の城跡。明治の偉人小村寿太郎候を育んだ「歴史と文化のかおる都市」日南市の人口は、現在、約５万人。本市には、小学校１２校、中学校６校、小中一貫校３校が設置されており、我々、学校図書司書は、各校を週に１回、もしくは２週間に１回、訪問勤務し、業務に携わる。司書４名で一人６校ずつ担当。包括業務委託先の社員として、本年度７年目を迎える。毎日の勤務ではないため、司書不在でも、図書館の機能を持続的に保持できる、有機的な図書館づくりを目指し、研究と実践を重ねてきた。

２　主題設定の理由

“Well-being”あなたは、生きている。ただそれだけで、価値がある。きらきらと輝くまなざしで、自らの課題と向き合い、明るい未来を設定して、しなやかに生きていく力。学ぶ喜びを感じながら、自分の人生と幸せを創り出していく、豊かな心。それらを育てていくには、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が、必須である。宮崎県が推進する『ひなたの学び』（ひとりひとりが問いをもち、なかまとなって、学び合い、たかめよう深く考える力）には、この「個別最適な学び」と「協働的な学び」が凝縮されている。「ひとりひとりが問いをもち、なかまとなって学び合い、高め合う」場所としての学校図書館。個々の課題に対応できる「ユニバーサルな学びの場所」としての学校図書館の本来の機能を、十分に生かせれば、「読書」と「読書活動」を通して、“個々の感性”を認め合い、それを、“特性”へと磨き上げていける場所ともなり得る。そこで、多様なニーズに応えられる「デザイン・フォア・オール」「ブック・フォア・オール」の図書館を創ることが、ひいては、『ひなたの学び』の“KEY STATION”になる最善の道だと考え、本主題を設定した。

３　研究目標

人は、誰もが特別な存在である。学校図書館は、その「学びに向かう」特別な一人一人の子どもの力を育む“KEY　STATION”である。共に認め合い、学び合う場所(多様性を包み込む、ユニバーサルな場)として機能する、充実した学校図書館づくりを目指す。

４　研究の仮説

「競争」から「共創」へ。「みんなで創る学校図書館」を合い言葉に、現代の子ども達に不足していると言われる「空間・時間・仲間」の「三間」を創ることができれば、学校図書館は、多様なニーズに応え、共に学び合うことも可能とする『ひなたの学び』を具現化できる“KEY　STATION”となるであろう。

５　研究の実際

（１）空間をつくる　～スペースを創る～

①　配置・配架　　『ユニバーサル仕様（館内動線の工夫)』

②　蔵書資料の再構築　　『除籍・刷新（循環)』

③　アートの力（いやしセンターとして）　……　情報の精選と統制（視覚的・聴覚的）

飫肥小学校では、上記３点を意識した“「であいの森」図書館　おび小　MEDIA　COSMOS”を令和４年度、全校の協働体制のもと、創った。我々は、この図書館をモデルにしながら、飫肥中学校・吾田中学校の図書館を、令和５年度末から、ユニバーサル仕様の空間へと変えていった。

（２）時間をつくる　～構造化（ルーティン化）の考え方を取り入れた、スキルの育成～

①　図書館オリエンテーション

年度当初に、その学年に応じた「オリエンテーション」を国語科の授業において、司書がゲスト・ティーチャーとなり、実施し、図書館活用のスキルを向上させた。

② ブック・タイム

大窪小学校では、毎週金曜日の朝を「ブック・タイム」として、設定している。司書来校日には、司書がよみきかせやブック・トークを行い、そうでない日には、児童が、お互いに本を紹介し合う「アウトプット読書」に取り組んでいる。これらの読書活動の後には、貸出・返却の時間も設けており、児童は、毎回３冊の図書を借りていく。毎週１回の時間を設定しているので、本校の（学校図書館）年間貸出冊数は、毎年一人平均 100 冊前後となる。加えて、本校には、市立図書館の移動図書館車「たいよう号」も、２週間に１回訪れ、児童は、市立図書館の企画「旅する読書」にも、積極的に取り組んでいる。このような時間や機会を確保することは、「本の貸し借り」スキルアップにも、つながっており、読書習慣の確立にも大いに有効である。

③ １バッグ・１ブック

吾田中学校では、４年前から生成り色の小さな手提げ袋を入学と同時に購入し「ブックバッグ」として、使用している。５月の「図書館オリエンテーション」から使い始め、いつも自分の机の横に携えておく。「朝読」や「隙間時間」には、そのバッグから本を取り出し、読書に親しんでいる。また、１年次の「美術科」の授業では、その袋に各自の名前をレタリング。「ブックバッグ」を愛用している姿は、まさに、宮崎県が推奨する「１BAG・１BOOK」そのものである。学校全体で取り組む時間の共有化は、ユニバーサルな学びの場としての「読書活動推進」に功を奏している。

（３）仲間をつくる　～本との出逢いの場を創造し、友と語らう場を創る～

① よみきかせ　　『五感をくすぐる絵本たち、そして、「語り」の力』

ア　昔話（神話）

イ　季節に応じた資料

ウ　セラピー絵本

② インタラクション活動（合理的配慮を有した）

『アクティブ・ラーニング』

ア　ファミ読（うちどく）カード

イ　リモートでビブリオバトル（紹介）極意書

ウ　昔話で読書ビンゴ（昔話クイズ）

③ ブック・トーク

『テーマで広がる読書の世界』

ア　支援学級・交流学習での取組

昔話（神話）……鵜戸でのよみきかせ

6　成果と課題

（１）成果

○　今回の「特別支援教育の視点で」という研究テーマをいただいたことで、日南市内の全小中学校の先生方とともに、各自が各校の現状を把握し、情報を共有し、考える場がもてたこと、また、各校の学校図書館が課題意識をもって、その改善策に取り組めたことが、一番の成果である。

○　“「であいの森」図書館　おび小　MEDIA　COSMOS”をモデルとして、「ユニバーサルな学びの場所」としての空間と時間の創生が、様々な方々とチームを組みながら、できている。

○　インタラクション活動では、「読書を通じて、このような“交流活動”ができて、よかった。」という生徒の感想から、共に学び、高め合う「仲間」創りの場が、最適な方法で提供できた。

（２）課題

●　「読書の楽しさ」や「読書活動の面白さ」を、まだ体感してない子ども達に、どんな空間で、どの時間に、どの本を、どのように手渡していくか、更に研究と実践を重ねていく必要がある。

●　各校の先生方との情報共有や、共通理解を行う場を、今後増やしていく必要を感じている。

7　おわりに

「海幸、山幸、人幸。日南には、三つの幸がある。」

人こそ、資源。海幸山幸に恵まれた、この豊かな風土。日南市。そこで、すくすくと育まれる感性。人を育てるとは、“感性”を育むことではなかろうか。人は、誰もが特別な存在である。我々は、その特別な一人一人の子どもの力を育む“KEY　STATION”としての学校図書館を、有機的に創造し続け、“感性豊かな”子ども達とともに、学ぶ喜びと幸せを共有しながら、その成長を支援していきたい。

第４分科会「豊かな心と学びを育む学校図書館」
～特別支援教育の視点に立った読書指導の充実～

日南市立南郷中学校　教諭　外林　義朗

１　はじめに

日南・串間支部は、小学校（日南市１２校、串間市９校）、中学校７校（日南市６校、串間市１校）、小中一貫校３校（すべて日南市）の合計３１校で構成されている。今年度の県大会における発表項目が「特別支援教育における読書活動」となっていることを受けて、昨年度より上記の研究主題等を設定し、以下に述べる研究内容で取り組んできた。

２　主題設定の理由

児童生徒が豊かな心や学びを育むためには、言語能力の育成が重要である。その言語能力の育成には読書活動が不可欠である。特に、障がいのある児童生徒においては、障がいの特性に応じた「読書環境の整備」や「読書習慣を形成させる取組」が重要である。また、令和元年６月には、障がいの有無にかかわらず、すべての人が読書による文字・活字文化の恩恵を受けられるように、「読書バリアフリー法」が成立し、障がいの有無にかかわらず全ての国民が読書を通した豊かな生活の推進が加速していくことが予想される。そこで、障がいのある児童生徒を含めた全ての児童生徒が進んで読書に親しみ、豊かな心と学び育むことができるようなユニバーサルデザインの視点に立った取組が必要であると考え、本主題を設定した。

３　研究目標

各学校において、全ての児童生徒が進んで読書に親しむようなユニバーサルデザインの視点に立った「読書環境の整備」や「読書習慣の形成の取組」の実践と共有を行うことで、各学校において特別支援教育の視点に立った読書活動の充実を目指す。

４　研究の仮説

各学校が全ての生徒が進んで読書に親しむような特別支援教育の視点（ユニバーサルデザインの視点）に立った「読書環境の整備」や「読書習慣の形成の取組」を実践及び共有していけば、児童生徒は進んで読書に親しみ、豊かな心を育むことに繋がるであろう。

５　研究の実際

（１）本地区内における特別支援教育の視点に立った読書指導等の実態把握

研究を進めるに当たって、まず本支部における特別支援教育の視点に立った読書指導等についての実態を把握するために、地区内の全学校を対象にアンケート調査を実施した。以下にその結果の一部を示す。

①　特別支援学級における読書活動の課題

特に中学校では、教科指導に関連した図書の購入をしても活用が少ない。さらなる広報が必要である。また、いわゆる基礎学力の向上とタブレットの活用のため、朝の読書活動がなくなってしまった中学校も少なくない。小学校と比べ、読書の時間自体が減ってきている。

②　特別支援学級における授業以外の読書活動

十進分類表にこだわらず、各学校の実態に合わせて本の配置を工夫した学校もある。例えば、「おすすめの本」の表紙が見えるような配置で書架を活用したり、入り口から本棚すべてが見渡せる配置の工夫をしたりもしている。

③　考察

特別支援学級においても、図書司書との連携や図書館の利用など、通常の学級と同様の読書活

動に取り組んでいる。しかし、そもそも文字を読むことが苦手であったり、一人一人のニーズが様々であったりするため、そうした課題解決のために各学校が試行錯誤を繰り返している。「読書環境の整備」に比べ「読書習慣の形成の取組」が弱いのではないかと思われる。

（２）　読書環境の整備

①　読書意欲を喚起するための工夫

○　書籍紹介のコーナーの設置・古典文学や近代の著名な小説文をコミック化したものの導入・気軽に立ち寄れる図書館環境の工夫。

○　各種イベントの工夫（文豪の写真をクラスで完成させる・読み聞かせや本の紹介の工夫）

②　特別支援学級担任との連携

○　書籍紹介の充実と授業における図書館の活用。

③　家庭との連携や情報発信

○　読みやすい本の購入（ルビ付きの本・日本語版の絵本と英訳本を並べての配置）。

○　紹介したい本をテーブルに平置きし、関心を高める。

（３）　読書習慣の形成の取組

①　読書指導の充実

○　小学生や特別支援（知的）学級への読み聞かせ・図書司書によるアニマシオン。

○　複数校によるビブリオバトルの実施。

※　国語科の指導による読解力の底上げ（短文作り・視写）

②　児童生徒による学校図書館運営

○　図書委員による企画の工夫（ポップコンテスト・人気図書アンケートの活用）

※　本文を一部引用し、掲示することで、本への関心を高める。

６　成果と課題

（１）　成果

○　各校の実践を地区で共有することにより、読書環境の整備が格段に進んだ。

○　教科担任との連携が増えるにつれて、特に美術・音楽・理科に関連した図書が充実した。

○　貸出数の変化はあまりなかったが、閲覧のために来館する生徒が増えてきた。

○　ルビ付の文章を視写したり、書籍の文章を書き写したりすることで、支援学級の生徒の読書意欲が高まった。

（２）　課題

●　図書購入の予算に限りがあるため、蔵書数や内容の充実に関しては各校でまだ差が見受けられる。

●　ルビ付の文章を読んでも内容の理解が進まない生徒が一部にいる。中学校の現場でも、読み聞かせ等の充実が必要だと思われる。

●　国語科と連携する場合、年間指導計画への位置づけ等の調整が必要である。生徒の実態に応じて、より多様な方法を模索する必要がある。

７　おわりに

今回の研究を通して、視写つまり「書き写すことによる読書」の効果が認められた。視写は、視覚を通して言葉を認識する営みである。視覚より聴覚に頼って学習することが多い生徒にとっては、視写より読み聞かせ等の手立てが有効なのかもしれない。だが、従来の読書の多くが黙読を指していたことに、一石を投じることはできた。今後の指導に生かしていきたい。

第５分科会　「学校司書・司書教諭の役割」
～図書主任の役割と学校司書との連携の在り方～

宮崎市立国富小学校　教諭　河野　歩美

１　はじめに

宮崎市図書主任会は、小学校４８校、中学校２７校、合計７５校で構成され、小学校には学校司書の配置があり、中学校には読書活動アシスタントが配置されている。各学校で図書主任と学校司書・読書活動アシスタントとが協力しながら読書活動の推進を行っている。

２　主題設定の理由

令和５・６年度は、児童生徒の読書活動推進のために、各学校での図書主任の役割と学校司書・読書活動アシスタントとの連携の在り方について研究を進めた。ここでは、小学校図書主任と学校司書の連携の在り方についての研究について述べる。

３　研究目標

宮崎市内小中学校の図書主任と学校司書・読書活動アシスタントとの連携をさらに深め、各校の読書活動の充実を図る。

４　研究の仮説

各学校の図書主任と学校司書との連携についての現状を捉えるとともに、実践について出し合うことで、各校の読書教育推進に役立てることができるであろう。

５　研究の実際

（１）事前アンケートの実施

宮崎市図書主任会では、各学校図書主任と学校司書へのアンケート調査を実施した。（令和５年６月実施）

①　図書主任へのアンケート（項目）

○　学校司書との連携・相談・協議などを行う時間
○　図書館活用の年間計画・図書館教育全体の作成
○　職員の図書館研修の実施（予定を含む）
○　学校司書の支援による、ティーム・ティーチング（Ｔ・Ｔ）の授業

②　学校司書へのアンケート（項目）

○　図書主任との連絡・相談・協議などを行う時間
○　図書主任との連携の充実度及び具体的な連携の取り方

（２）具体的な実践

アンケートの各項目の具体的実践例として次の内容が挙げられた。

①　具体的な連携の取り方

小学校の図書主任は、学級担任であることが多いため、様々な方法を取りながらお互いの連携を行っている。

○日誌、付箋、メモ用紙等を活用した連絡、情報交換　○委員会の時間の活用 ○図書主任の学級の読書の時間

②　図書館教育全体計画・年間計画・図書館研修の活用

各学校では、図書館教育全体計画・年間計画・図書館研修計画などが策定され、学校司書とも連携を取りながら各計画の推進を図っている。

○授業や単元に関連する本の準備、調べ学習に必要な本の準備、活用 ○授業等に関する本の公立図書館との連携 ○行事に合わせた本の準備、選定（愛鳥週間、命の週間など）

③　学級担任と学校司書とのティーム・ティーチング

学級担任と学校司書とのティーム・ティーチングによる指導も行っている学校も多い。

○年度初めの図書館利用に関するオリエンテーションの実施 ○授業の中での「読み聞かせ・ブックトーク・アニマシオン」の実施 ○国語辞典、百科事典の使い方に関する授業でのＴ・Ｔ

また、授業への協力として次の内容が挙げられている。

○授業で使用する関連図書の選定、貸出	○市立図書館との連絡
○レファレンス（相談体制）の充実	○パスファインダーの紹介

④　教育活動のコーディネート

図書主任の役割として、図書主任がコーディネート役として、学校司書と他の職員との連携をとることも役割の一つである。

⑤　図書主任・学校司書・読書活動アシスタント合同研修会の実施

令和５年度は、宮崎市教育員会の協力により、７月に各学校図書主任と学校司書・読書活動アシスタントとの合同研修会を実施した。読書推進のための手立てを考える機会となった。

（３）事後アンケートの実施

研究の振り返りを行うために、再びアンケートを行った。その結果は次のとおりである。（令和６年２月実施）

○　本年度の「連携」について

図書主任の回答結果は、学校司書と「連携できている」という肯定的な回答の割合が９０％以上である。また、 学校司書の回答結果は、図書主任と「連携できている」という肯定的な回答が９０％を超えている。５月よりも、「連携できている」とする割合が増えている。

6　成果と課題

（１）　成果

○　アンケートを実施したことにより、「連携」についての現状や悩み、今後の見通しなどについて確かめることができた。また、年度末にもアンケートを実施し、その変容を見ることができた。

○　他校と協議を行うことで、他校の実践を知ることができ、取り入れられる実践は積極的に取り入れていこうという気持ちをもてた。

（２）　課題

●　今後、どのように連携の充実につなげていくかについてはこれからも実践を通してよりよい連携の在り方を模索していかなければならない。

7　おわりに

今回の研究を通して、図書主任と学校司書の連携の在り方について、再度見直すことができた。連携の方法等を考え、自校に合った方法を取り入れ、児童の読書活動の推進を図っていきたい。

第５分科会「学校司書・司書教諭の役割」
～図書主任の役割と読書活動アシスタントとの連携の在り方～

宮崎市立広瀬中学校　教諭　有田　桂子

１　はじめに

宮崎市図書主任会は、小学校４８校、中学校２７校、合計７５校で構成され、小学校には学校司書の配置があり、中学校には読書活動アシスタントが配置されている。各学校で図書主任と学校司書・読書活動アシスタントとが協力しながら読書活動の推進を行っている。

２　主題設定の理由

令和５・６年度は、児童生徒の読書活動推進のために、各学校での図書主任の役割と学校司書・読書活動アシスタントとの連携の在り方について研究を進めた。ここでは、中学校図書主任と読書活動アシスタントとの連携の在り方についての研究について述べる。

３　研究目標

宮崎市内小中学校の図書主任と学校司書・読書活動アシスタントとの連携をさらに深め、各校の読書活動の充実を図る。

４　研究仮説

各学校の図書主任と読書活動アシスタントとの連携についての現状を捉えるとともに、実践について出し合うことで、各校の読書教育推進に役立てることができるであろう。

５　研究の実際

⑴　事前アンケート調査の実施

宮崎市図書主任会では、各学校図書主任と読書活動アシスタントへのアンケート調査を実施した。（令和５年６月実施）アンケートの各項目の具体的実践例として次の内容が挙げられた。

①　連携の方法について

読書活動アシスタントは週１５時間の勤務であるので、各学校とも様々な工夫を行い、連携を図っている。

活用例…日誌、図書ノート、連絡ノート、パソコン、通信機器等の活用

②　図書館活用の年間計画・図書館教育全体計画について

年間計画等については、およそ７割の学校で作成されている。

記入項目例…図書館配当、学級文庫の配置、利用計画、オリエンテーション予定

③　職員の図書館研修について

図書館研修では「図書館教育部会での研修内容の報告」「夏休みの蔵書点検の職員での実施」等を行っている。

④　読書活動アシスタントとのティーム・ティーチング授業について

「中学１年生へのオリエンテーション（図書館のきまり・システムなどの説明）」「選書や完成したPOPの掲示のサポート」などが挙げられている。

⑵　図書主任としての具体的実践

図書主任として「教育活動コーディネート」「情報リテラシー」「新聞の活用」についてどのような活動を行っているか出し合った。

①　教育活動コーディネート

各学校の図書主任は、生徒の読書活動の推進に向けて努力している。

また、読書活動アシスタントと連携を取りながら、日々の業務に取り組んでいるが、学校全体を見通した活動も行うように心がけている。

② 情報リテラシー

図書館利用の際に、資料を探している生徒には読書活動アシスタントからのアドバイスを行っている。

③ 新聞の活用

新聞の活用では、各学校でさまざまな工夫を行い、生徒に少しでも現代社会の情勢について知ってもらうために努力している。

活用例…新聞掲示台の作成、見やすい場所への配置、教科での活用

⑶ 読書活動アシスタントの授業での連携

読書活動アシスタントとの授業での連携として、１年生への図書館オリエンテーションがある。具体例として次のような内容になる。

○読書活動アシスタントは資料準備を中心として実施した。 ○事前準備での打ち合わせをしっかりと行い、手順を確認した。 ○当日も一緒に授業に臨み、授業者の補足を行ったり、グループ活動で生徒へのアドバイス等を行ったりした。

⑷ 図書主任・学校司書・読書活動アシスタント合同研修会の実施

令和５年度は、宮崎市教育員会の協力により、７月に各学校図書主任と学校司書・読書活動アシスタントとの合同研修会を実施した。図書主任と読書活動アシスタントとが普段なかなかじっくりと話し合うことができないこともあり、この機会を利用していろいろな話をすることができた。

⑸ 事後アンケートの実施

研究の振り返りを行うために、再びアンケートを行った。その結果は次のとおりである。（令和６年２月実施）

○ 図書主任の本年度の「連携」に対する回答結果…「できている」という肯定的な回答は６６％である。一方、２８％の学校が「以前も今もあまり連携できていない」という回答が見られた。

○ 読書活動アシスタントの「連携」に対する回答結果…「できている」という肯定的な回答は８８％であった。「できていない」とする回答は今回は９％であり、６月の１８％から改善されてきた。

6 研究の成果と課題

研究を通して、次のような成果と課題が挙げられる。

⑴ 成果

○ 図書主任及び読書活動アシスタントへアンケートを実施したことにより、「連携」についての現状や悩みについて知ることができた。

○ 図書主任の役割や連携の方法について各校の実践を挙げたことで、他校での取組について知ることができ、自校の読書活動の推進の参考にできた。

⑵ 課題

● 読書活動アシスタントとの連携については「時間のなさをどのように補うか」が大きな要因であるので、自校に適した方法を使いながら、さらなる連携の充実を図っていきたい。

7 おわりに

中学生の不読率を下げることは、大きな課題であると思われるので、今後もさらに読書活動アシスタントと連携しながら、学校の読書活動推進のために工夫をしていきたい。

第６分科会　「豊かな心と学びを育む学校図書館」
～地域・家庭・公共図書館との連携を通して～

延岡市立北川小学校　教諭　泉美　麻里

１　はじめに

本校は県の北部に位置し、清流北川をたたえた自然と共存する地域である。初夏にはホタルが乱舞し、鮎をはじめとする生き物を間近に見られることで有名である。

本校は児童数１０５名の小規模校であり、「進んで学び　心豊かで　たくましく　ひとりだちできる児童の育成」という学校の教育目標のもと自信や自己肯定感をもって行動できる児童の育成をめざして、教育活動を推進している。地域とともに児童を育む学校づくりをめざして実施した「みんなの幸せのためにしゃべろう会」（地域・家庭・学校のフリートーク）で出された意見の中には、読書好きの児童に育って欲しいという願いもあった。

２　主題設定の理由

本市は、めざす子ども像に「自他の幸せのために学び行動する子どもの育成」（幸動）を掲げ、日々教育活動を推進している。その１０の基本方針の中の一つに豊かな心の育成があり、施策に読書教育の推進が挙げられている。読書活動が基礎学力の土台を築き、心を安定させることは以前から言われているものの、読書よりもメディアへの興味が高く、読書の楽しみを感じられている児童は少ない。また、学校で読書をする時間も限られている。そんな中、児童が少しでも読書に親しみ、本を好きになってくれるようにと様々な読書活動を実施しているが十分とは言えない。充実した読書活動を推進するためには、関係機関との連携が必要であることを再認識した。

そこで、地域・家庭、公共図書館、各学校の強みを生かし、情報を共有することは、児童の読書意欲を高め、豊かな心の醸成につながると考え本主題を設定した。

３　研究目標

○　地域・家庭、公共図書館及び各学校との連携を深め、児童の読書への意欲や関心を高める読書活動を行うことを通して豊かな心の素地を培う。

４　研究の仮説

○　学校図書館を核として、地域・家庭・公共図書館、また、他校の図書館教育の情報を共有し、様々な角度からアプローチしていけば、児童は読書への興味・関心を高め読書を通して豊かな心を育む素地が培われるだろう。

５　研究の実際

（１）他校との図書館教育の共有

ア　学校図書館の役割は大きく、その重要性も高い。しかし、図書館教育を担う図書主任は多忙感が強く、運営に困難さを感じている図書主任も少なからずいる。そこで、図書主任会で図書館教育運営についての取組を共有した。また、市の一時掲載フォルダに作成した文書や資料を保存することで誰でも活用できるようにした。

（２）家庭との連携

ア　保護者への啓発

読書の大切さを保護者に啓発するために全校懇談で「もっと本のある環境を」と題してプレゼンを行い、学校が読書を推進していることを周知する機会とした。

イ　家庭での読書活動の推進

「火曜日は読書の日」を設定し通常の宿題を読書に替えた。読書の記録を残し、感想等を放送や掲示で伝えるようにした。自分の感想や意見をもつ機会ともなるようにした。アンケートでは、８割の児童がこの取組を楽しみにしている。

ウ　学校での取組や新刊の紹介等の情報を掲載した「図書館だより」の発行

図書館まつりの内容やその様子、図書ボランティアの募集・読書の日の周知など図書館教育の情報を家庭と共有できるようにした。

（３）地域との連携

ア　読み聞かせボランティア

図書ボランティアと読み聞かせボランティアをＰＴＡ活動の中に位置付けている。図書ボランティアは、図書委員会の児童の補助や本の整理、修理等を行う。読み聞かせボランティアは朝の時間に読み聞かせを実施している。月に１回～２回程度ではあるが、児童は楽しみにしている。

イ　「ととろ三人の会」の語り・読み聞かせ

年に１度「ととろ三人の会」の方に読み聞かせ等のご協力をいただいている。学年部の実態に合わせて絵本の読み聞かせや科学雑誌の紹介、そしてお話の語りを聞かせていただいている。昨年度も外国の少し怖いお話を引き込ませるような独特の語りで聞かせてくださり、児童も身を乗り出して聞き入っていた。

（４）公共図書館との連携

ア　移動図書館や資料センターとしての役割

市立図書館の移動図書館「せせらぎ号」が月に一度来校することを児童は心待ちにしている。学校にはない本が多数あり、貸出数も年間２７３８冊にのぼる。また、国語学習や総合的な学習の時間での資料等を団体貸し出しで利用している。

イ　図書館まつりでの読書活動支援

各学校で開催されることの多い「図書館まつり」において、読み聞かせやアニマシオン等で読書の楽しさを児童に伝えている。専門性を生かし、児童の興味関心を高める取組である。これは、職員にとっても本の紹介等の技術を知るよい機会となっている。児童の感想によるとアニマシオンの取組はたいへん好評であった。

6　成果と課題

（１）　成果

○　地域や公共図書館の協力を得ながら本に親しむ活動を充実することは、児童の読書意欲を高めることができた。

○　家庭での読書時間を確保する取組により、進んで読書を行い読書の楽しさに気付く児童が増えた。

（２）　課題

●　読書を好む児童と苦手感をもつ児童との二極化を解消する必要がある。

●　家庭でのメディアコントロールと読書時間の確保について、児童の意識の変容と家庭の協力が必要である。

7　おわりに

今回の研究を通して、地域や家庭、公共図書館との連携の必要性を再認識することができた。互いのもつ思いや専門性を共有し、今後も児童が「読書が楽しい」と感じる読書活動を更に充実させたい。

第６分科会「豊かな心と学びを育む学校図書館」
～地域・家庭・公共図書館との連携を通して～

延岡市立島野浦学園　後期課程　教諭　甲斐　聖佳

１　はじめに

延岡市には、小学校２６校、中学校１５校、義務教育学校１校があり、図書主任会のおりに各学校の取組や実践について情報交換しながら、図書館教育を進めている。また、本市では、目指す子ども像に「幸動　自他の幸せのために学び行動する子どもの育成」を掲げている。その基本方針の中に「豊かな心の育成」があり、主な施策に「読書教育の推進」が挙げられており、地域や家庭、学校が連携を深めながら、乳幼児期から切れ目のない継続的な読書活動の推進を図っている。

２　主題設定の理由

生活環境の変化や、ゲーム・ＳＮＳなどのメディアに多くの時間を割く昨今、本市でも児童・生徒の読書離れが問題となっている。学習指導要領にもあるように、児童生徒の自主的・自発的な読書活動の充実が求められている。また、中学校国語科では、改定の内容として「読書指導の改善・充実」が明記され、児童生徒が読書することは、「人生をより豊かなものにするだけでなく、言葉を学び、感性を磨き、表現を高め、想像力を豊かにする」うえで極めて重要である。そのためには、子どもたちが本を読むことで、楽しさを味わったり、新しい知識や事実を知ったり、心をふるわす感動を得たり、新しい語彙を習得したりする場に出会えるように、教師が意図的に仕組んでいくことが必要である。そこで、学校が地域や家庭、公共図書館と連携しながら、本に親しみを持てる仕組みを増やしていくことで、読書に興味関心を持ち、自発的に本を読む時間を増やし、生徒の豊かな心と学びを育むことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

３　研究目標

地域・家庭・公共図書館と連携して読書活動を推進することで、生徒に読書への興味関心をもたせ、読書教育の充実を図る。

４　研究の仮説

地域・家庭・公共図書館と連携して推進すれば、生徒に読書への興味関心をもたせ、豊かな心や学びを育むことができるのではないか。

５　研究の実際

（１）　岡富中学校での延岡市立図書館を活用した「ビブリオバトル」への取組

岡富中学校では、市立図書館と連携し、「ビブリオバトル講習・実演」を行った。市立図書館職員にビブリオバトルについて説明してもらい、図書館職員代表１名、中学校生徒代表２名で実際にビブリオバトルを行った。事後指導として、全校生徒対象に国語の授業でビブリオバトルを行い、学年代表が文化祭で全校決勝を行った。

チャンプ本を決めることで生徒が本当に紹介したい本を選ぶこととなり、読書に親しむきっかけになった。また、幅広いジャンルから紹介されるため、自分がいつも手にしない分野の本へ興味をもたせた。さらに、ビブリオバトルで紹介された本を学校図書館に入れると、休み時間に足を踏み入れる生徒が増えた。図書館職員の方が実演により、ライブ感のある聞き手の興味を引き付ける紹介の仕方に感銘を受け、自身の発表の参考とした生徒もおり、深い学びとなった。

（２）　北川中学校での延岡市立図書館を活用した「ＰＯＰ作成」への取組

北川中学校では、中学１年生の国語の単元「読書を楽しむ」でＰＯＰ作りを行った。本を選ぶ際に市立図書館を訪問して紹介する本を選んだ。訪問時に図書館主催のＰＯＰ展が開催されていたので、それらを参考にしてレイアウトを考え、後日学校で仕上げ校内掲示板に作品を掲示した。日頃訪れることのない公共施設での活動に緊張しながらも意欲的に取り組むことができた。

（３）　旭中学校での延岡市立図書館の「絵のレプリカ」を活用した授業での取組

旭中学校では、市立図書館からルネサンス期の絵画のレプリカ２点（レオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』とサンドロ・ボッティチェリの『春（ラ・プリマヴェーラ）』）を借用し、中学２年生の国語の単元「君は『最後の晩餐』を知っているか」の導入の時間でレプリカを紹介・展示した。また、学校図書館にある美術関連の本も合わせて紹介した。

実物に近い物を見ることで、本文に興味・関心をもたせることをねらいとした。生徒たちは、教科書と同じ絵画が目の前にあることに驚いていた。レプリカであることは伝えたが、立派な額縁に入っていることもあり、一瞬「まさか本物？」と思った生徒もいたようだ。友達と話しながら細部まで観察することができ、興味・関心をもって本文を読むことにつながった。レプリカや資料を見せることで、学校図書館への興味や読書の範囲を広げることにつながったと考える。

（４）　島野浦学園での地域・家庭と連携した「親子読書」への取組

島野浦学園では、昨年度から６月と１２月に親子で読書する週間を設定している。四つのコースから選択し、家庭での読書に取り組ませた。

ア　保護者が子どもに読み聞かせをする
イ　子供が家族に読み聞かせをする
ウ　場や時間を共有して別々に本を読む
エ　別々に本を読み感想を共有しあう

児童生徒から「あんまり本を読まないので、いい経験ができた。家族で触れ合う時間がとても楽しかった。」「お父さん、お母さんと本を読むのは楽しかった。この時間が増えるといいと思った。」などの感想が多く、普段あまり読書に興味を示していない児童生徒が、読書は楽しいと思えるきっかけになっている。保護者からも、「子どもと一緒に読書をする時間はとてもいい時間でした。なかなかこんな時間はとれないけど、普段の生活の中に取り入れようと思います。」など取組に対する前向きな意見が多く、家庭で読書に親しむ時間を持つ環境づくりを促進しており、親子で豊かな心を育む取組となった。また、島野浦には公共図書館が無いため、今回の取組により児童生徒だけでなく、保護者も学校図書館に本を借りに来ていた。地域が学校図書館を身近に感じられるような活動にもつながっている。

６　成果と課題

（１）　成果

○　日常的に本を読む習慣が少ない児童生徒も活動中は、読書が楽しいと思えたり自主的に活動に取り組めたりし、図書館や読書への興味関心を持つ児童生徒が増えた。
○　普段なかなか訪れない市立図書館に足を運んだり、図書館の資料活用や職員と活動することにより、図書館がより身近な場所になった。
○　取組前より取組後の学校図書館の貸し出し冊数が増え、読書量が増加し、少しずつではあるが図書館利用の活性化も見られるようになった。

（２）　課題

●　取組により、読書への関心は高まったが読書の習慣化までには至っていない。豊かな心と学びを育むためには、図書のイベント活動として終わるのではなく、日常的な読書活動につなげていく必要がある。

７　おわりに

今回の研究を通して、地域や家庭、市立図書館と連携して読書活動を進めることで、児童生徒の読書に対する興味関心が高まることが分かった。日常における読書活動が進むよう、学校・地域・家庭・公共図書館等の様々な機関が今後も連携・協力して、更なる取組を工夫していきたい。

第６分科会　「地域・家庭・公共図書館との連携」
～「本」に関わるボランティアを通して～

宮崎県立宮崎商業高等学校　教諭　厚地　晃子

1　はじめに

本校は、宮崎県の中心部に位置する、商業マネージメント科、情報ソリューション科、グローバル経済科の３学科、計21クラス、全校生徒数765名の専門高校である。創立105年目を迎え、一昨年の学科改正により４学科から３学科になった。検定取得やスポーツ（6競技が県の強化指定を受けている）に全力で励む生徒の姿が見られる。

2　主題設定の理由

２年前より「Book Picnic」の運営に協力する機会をいただき、本校図書委員を中心に活動を行ってきた。さまざまな本に関わるボランティアがある中で、本校独自の取組を紹介したいと思い、このテーマに設定した。

3　研究目標

高校生が本を通じて地域ボランティアをする意義として、(1)社会貢献とコミュニティの発展への一助となること、(2)自己成長とコミュニケーション力の向上につながること、(3)進路学習の一環になること、(4)生涯を通じた読書活動の促進につながること、などを考える。校内での読書推進活動はもちろんのこと、地域や社会に目を向けた活動を通して、読書活動が個人の楽しみから社会貢献や自己成長の手段に変わることを実感して欲しい。

4　研究の仮説

「本」が地域の人々との交流を図るツールとなることを知り、他の人に「本」を紹介する経験をすることで、今後の読書の幅が広がり、本や読書に関する知識を深めるきっかけになるのではないだろうか。また、子どもたちや高齢者など異なる世代に対する支援活動を行うことで、社会全体の一員としての責任感が芽生えるとともに、地域社会への貢献を通じて自己成長を促すことができるのではないか。

5　研究の実際

ア　概要

「Book Picnic」は宮崎県立総合文化公園の敷地内で、本、レジャーシート、ハンモックを来園者に無料で貸出し、自然の中で読書を楽しんでもらう催しである。令和２年秋に「こどもと本をつなぐネットワーク」の有志の方々から始まり、当初は本とピクニックシートのみの貸出しだった。その後、文化公園を管理している株式会社馬原造園建設が主催（県立図書館共催）となり、「緑と本に親しんでもらう」ことをコンセプトに、ハンモックの貸出も始めた。春（5月）と秋（９月もしくは10月）の年2回開催される。本校は令和４年の秋から、運営や受付、読み聞かせ活動、しおり・ミニ本作りの補助等にあたるボランティアに参加し始めた。そして、令和５年５月より、県立図書館とともに共催として活動を始めた。昨年９月の開催時は、本校音楽部による演奏会も実施し、緑と本と音楽のコラボレーションを来園者に楽しんでもらった。

イ　取組の実際

①　読み聞かせ活動

県立図書館よりマイラインを利用して借りた大型絵本や本校持ち込みの絵本を、生徒が読み聞かせをする。小さな子どもを連れた方や、小学生に好評だった。

② 本、シート、ハンモック貸出業務

本校図書館より生徒たちが選んだ本を貸出す。シート、ハンモックは番号札を発行し、時間を決めて利用してもらう。併せてアンケート用紙も配付する。

③ しおり・ミニ本作りの補助

しおりやミニ本を本校生徒の教示のもと、来園者に作成してもらう。

6 成果と課題

（1） 成果

今回４回目の「Book Picnic」への参加だったが、本校の役割が年々大きくなっているため、より責任ややりがいを感じた生徒が多かった。そのため、「させられる」のではなく、来園者に自発的に関わろうとする様子がさまざまな場面でうかがえた。例えば、来園者と話をしながら来園者好みの本を探したり、子どもたちの話を聞きながら読み聞かせの本を一緒に選んだり、園内を回って催しの案内をしたりする姿などである。

準備や運営、読み聞かせ、しおり・ミニ本作りを通して、さまざまな年代の方々とコミュニケーションができる機会となった。イベント後の生徒のアンケートからも、「やりがいがあった」、「普段学校では触れ合えない年代の人と触れ合えてよかった」、「小さい子どもとの接し方やどう説明すればわかりやすくなるかを考えることができた」、「子どもたちが楽しそうに話を聞いてくれて嬉しかった」、「将来、保育士になりたいので、この経験が役に立つと思う」など、上記「３ 研究目標」で述べた意義が果たされたと感じる。特に、異なる背景や年齢層の人々と交流できたことは、生徒たちにとって貴重な経験となったようだ。また来場者からは、「毎年楽しみにしている。」、「毎月定期的に開催して欲しい。」、「絵本を読んでもらっている間リラックスできた。ありがたい。」という声が多く聞かれ、生徒たちの社会貢献の意識が高まる機会となった。

（2） 課題

年に２回の実施だが、来場者のアンケートや声でも「毎月開催してほしい」との要望があった。生徒にも人気のあるボランティアなので、関係機関と検討して、実施回数を増やせないかと考える。屋外での催しのため、天気によって来場者数が変わる。雨天時でも楽しめる場所や内容を考えていきたい。

また、昨年秋に行った演奏会に引き続き、今年の秋にはポエトリーリーディングやスチールドラム演奏も併せて実施予定である。これからも読書活動と一緒に実施できる文化活動を生徒とともに考え、来園者の興味・関心を引きつける工夫をしていきたい。

7 おわりに

今後は「本」を通して自己成長につながるようなさまざまな活動をしていきたい。例えば、次のような活動への参加も検討している。

○ 図書館でのボランティア:図書の整理や貸出業務の手伝い、読書イベントのサポート。
○ 読書会の開催: 地域の人々を対象にした読書会の運営や、本の紹介、読み聞かせなど。
○ ブックドライブの企画: 不要になった本を集めて、必要な人や施設に寄付する活動。

一冊の「本」からつながる縁を大切にし、生涯を通して読書を楽しむことのできる生徒の育成にこれからも尽力したい。また、積極的にボランティア活動に参加する姿勢が、他の生徒や地域社会にとってポジティブなロールモデルとなることを願う。